

恋愛のアナ・ボル論争

山川菊枝と高群逸枝

(1)

秋 山 清

はからずも手に入れた、ささやかで奇妙な論争の記録がある。それを何と名づくべきかにいささか途惑いながら、昭和初期の女性たちによる「恋愛のアナ・ボル論争」と呼ぶことにした。他にいうべき好い名称がなかったからでもある。不十分にしか論じ合わずに終結してしまうのがアナ・ボル論争といわれるものの常の姿であり、この論争もその弊をまぬがれなかったものであるが、なおそこには現在の女性に於ける、政治と生活の問題に示唆するというべきものをのこしている。例のように論争の趣旨は、故意にか偶然にか行きちがいと不徹底のままに通り過ぎてしまっではいるが、そのような終結の姿の中にも、幾つかのアナ・ボル論争とひとしく昭和初期の時代相がある。省みるべき意義は、論争の焦点がつつめられなかったことの、その時代的性格を考えることによってかえって得られるかもしれない。

私がとりあげようとするものは一九二八年（昭和三）の『婦人公論』一月号にはじまる次の、ささやかな論争である。

景品つき特価品としての女
 山川菊枝氏の恋愛観を難す
 ドグマから出た幽霊
 高群逸枝氏新発見のマルクス主義社会について
 踏まれた犬が吠える
 ふたたび山川菊枝氏に
 ロマンチズムとリアリズム
 一九二八・一 婦人公論 山川 菊枝
 一九二八・五 婦人公論 高群 逸枝
 一九二八・六 婦人公論 山川 菊枝
 一九二八・七 婦人公論 高群 逸枝
 一九二八・九 婦人公論 平林たい子
 ——山川菊枝高群逸枝両氏の論争の批判

この論争はアナ・ボル論争として特筆すべき内容のものとはいえないが、なお次のような特長がある。革命思想として大正の一桁時代に注目されたアナ・ボルの論争が、社会運動の面における消長によってその思想的現実的評価としての優劣が定まったかに見える以後のものであること。この論争の翌年に『女人芸術』に展開されたアナ・ボル論争の前触れの性格をもっていること。昨今その全集などによって改めて注目されつつある高群逸枝の、かかる論争におけるおそらく初めての登場であり、かつその異色のアナキズム的造

謂がこの論争における特長となつてゐることなど、私の興味をそそるものがあった。

さて、最初の山川菊枝の「景品つき特価品としての女」は風俗批判としてなかなか含蓄ある文章であつた。この場合の含蓄とは、女性のかいた女性への時事的批評としてかなり痛烈だ、ということである。

山川の主張は、新聞の案内広告欄における

「地所家屋売買、今が安値のドン底、お買入の好時期」

「売店舗、市内二流目貫の場所、何業にも適し何業にても一番繁盛する、破格譲、秘密にて」

などというものと、次のものとの酷似ということの紹介からはじめられてゐる。

「嫁度三十六裁縫茶湯生花書道等女芸万能蓄財数千性質温雅容美体健全可成東京在任方子有も不厭急御来談乞……」

「嫁度四十五若向一見三十五華族女学出身絶世美人濃艶気品不動産数万有不幸単独不望高人物本位御来談に限る」

これら女性側からの求縁広告文のいくつかをひろい出して書いて、さて山川はこんな風にならうのである。

「土地でも家でも電話でも商店でも病院でも会社でもタイプライターのでも、すべてが『破格の安値』で取引されるこの廉売市場のなかでも、とりわけ掘出し物は人間——女の——売物であるらしい。」

「一夜か、一月か、一生涯か、その契約期間や相場は『御来談に限る』『秘密面談』の問題と見えて、『女芸万能』『絶世美人』『蓄財数千』『不動産数万』等々の景品付きの婦人が『先様次第』で、

「女は——どの道、一生を売りつける相手を探し求めねばならぬ売物たる点に変わりはない。男子に対する経済的依属、即ち在来の男女関係の根本にはふれず、ただ恋愛の色どりを添えるだけに満足することは、売物としての女に、うちかけの代りに洋装させるというだけの、外形の近代化にすぎない——」

山川菊枝のこの意見には、厨川白村などが大正末期に言つた恋愛の近代化、個人主義的な意味での自由な恋愛という、近代の恋愛観の拒絶的批判がある。それは恋愛近代化への否定というよりも、社会改革なしの自由主義的な男女関係の改良が不可能であることをいいたかつてであり、いいかえれば社会主義的立場からする個人主義と自由主義の否定である。私はこの山川の意見につぶさに反対するものではない。抽象的な見解としてはもっともだと思ふ。しかしまた大きく気懸りなところもないではない。

「婦人雑誌の巻頭をかざる特等品としてにせよ、新聞の三行広告に、足袋や電熱器やタイプライターの在庫品と肩を並べる特価品としてにせよ、どの道、一生を売りつける相手を探し求めねばならぬ売物たる点に変わりはない。」

という山川の言葉にそのまま反対するものではないとしても、かかる発言の背後に在るものには危惧を感じる。いわば山川をしてこのように云わしめた彼女の恋愛観——男女関係観の中にその何かが潜んでゐることには危惧である。

経済関係によつて在来の男女関係を割切つて見せようとする態度は「先ずいい。ただ経済関係とその変化だけに、人間社会の変化と進化のすべてが支配されている、というような単純な裁断に、不安がある。明治の社会主義者も一応は男女関係の平等を考えたが、事

求縁の申込みに応ずるとは、実に女の身ほど嫌い売物はないという感がする。」

こういわれてみると、昭和のはじめ頃にはこのような小さな広告が新聞に数多く発見されたことが思い出される。如何にも「景品つき」女の売出し、といった感なきにしもあらずである。そして山川はさらにこういう言葉をつけ加える。

「景品つきで新聞に広告されるものだけが売物ではない。婦人雑誌巻頭の『令嬢かがみ』は、娼家の軒先をかざる女達の写真の陳列と、どれだけ違った意味をもつたらう？」

かくて山川菊枝がいたかつたのは「現代娘は大いに覚醒したという。自己の価値に目ざめて、愛しない男を拒絶するだけの意志をもつようになったというが、即ち恋愛のない結婚を罪悪とするまでに進んだというが、現実の問題としてどの程度までそれが実行されているか」という疑問の提出であつたが、こういった提出をあえてしたその真意は次のことであつたのである。

「恋愛結婚といえども、一年たち二年たちして、家族がふえ、家庭が煩雑となつたとき、やがて残るものは、現在の男性本位の経済的基礎に立つ伝統的な夫婦関係のみであつて、その最初の結合の形式に特殊の色彩と意義とを添えた恋愛の如きは、精々甘い追憶として残るのが関の山であらう。」

「男子が一家の経済的中心である現在の家族生活の基礎に変化のない限り、一般の原則としての夫婦関係には、苦しい変化の起りようがなく、したがつて経済的従属関係のない、対等の個人同志の間に結ばれるような、純粹單純な恋愛関係が、結婚後まで持続されることの不可能な点にある。」

実としては家にかえると亭主関白であつたことが一般的であつた。理想と現実、理想と理論とのギャップといひきつて通りすぎるにはこれはもう少し考えてみるべき歴史的な問題ではないだろうか。

山川菊枝のように、大正期における結婚を「一生を売りつける相手の探索」といひきつて見せるだけでは、何ごとも社会革命後でなければ改革は不可能だとして、今日たたいまの、われわれが日常的に解決あるいは改良し得べく、またそうしなければならぬ問題を、ネグつてしまふことになりかねない。かくては、これは経済主義による怠慢というものになつてしまふだろう。もう一つ云えば、恋愛において、恋愛する各個人の問題が置き忘れられかねないということである。むしろ山川は景品付特価品としての女、というどぎつい表現によつて、経済が支配している社会的現実が目ざめよ、と忠告しているのであるかもしれないが、恋愛当事者における欲望、憧れ、その実現という個人の立場から現実へアプローチすることの情熱的意義を軽んじているかのようである。

「現代の娘は恋愛を尊重するといふ。しかし、その尊重のし方が、新しい化粧法に対するのと甚だ似通つてゐると思はれるのは辟目だろうか。最もよき買手をひきつけるための技巧としての新しい化粧法と共通の意義しかもたぬ程度の恋愛！ 売物としての彼女に一段の魅力を添えるための恋愛！ この装飾的な恋愛の技巧、もつとも有利な取引を確保する手段としての恋愛の技巧！ 今日多くの娘たちの胸に描いてゐる恋愛結婚というものは、この程度の、そしてこういう種類の恋愛によつて獲得された結婚——取引——にすぎないのではあるまいか。」

山川のかかる恋愛軽蔑の言葉につづく意見は「婦人が、何等かの

人格的、経済的独立というものを要求することなく、夫婦関係の本質、その経済的基礎に变革を求めることなし」に夫婦関係成立の手続きに恋愛の加味されることだけを要求するならば「この形式の變化は、島田を耳かくしにかえたのと、實質的變化はない」という主張である。だから現代の娘（昭和初期）は「売り物としての自己の地位を自覚していない」という揶揄的な結論に到達し得るのである。ここにはおくれた日本人の結婚、あるいは恋愛についての何かの批判がある。しかしより根底的に男女の生きる関係としての結婚、夫婦制度、恋愛について、自由な人間の立場においての考察はないようである。明治の社会主義者が、男女関係を架空の次元において自由にとらえ、現実においては封建的な家族制度の外に脱出し得なかつたことと、どこかで通じあうものがある。感覚的にも、現実的にも、これはすぎ去った時代のものにつながらすぎているかに見える。だから山川菊枝が良心的結論として次のように、

「恋愛を売らずにすむ時代は、同時に彼女が結婚によらずして生活し得る時代——まじめな労働によってのみ生活し得る時代でなければならぬ。婦人が単に性の対象たることに満足し、性によって生活することに何らの不満と屈辱とを感ぜずにいる間は、職業的娼婦たるか否とを問わず、彼女はついに性的奴隷であり、売物の一つであることは変りはない。」

といったとき、この言葉からは四書五経的なおのの発散するといふ思いを禁じ得なかつた。また「人間」よりもイデオロギーとしての「社会主義」が優先するという極めて前近代な恋愛観のようにも見えて仕方なかつたのである。

この山川菊枝の所論にたいして、高群逸枝が「山川菊枝氏の恋愛

観を難す」を発表したのは、それから四カ月後の『婦人公論』五月号の誌上であつた。高群はまずこういつて食つてかかる。

「私は常日頃、マルクス主義経済組織と恋愛——氏のいわゆる純粋素朴な恋愛とが相容るかどうかについて、多くの疑いを抱いていた。氏等のマルクス主義思想家によれば、それは一も二もなく相容るもので、実にマルクス主義経済組織のみが、これらの一切の難問題を解決する鍵であるというのだった。」

こういつて高群は二つの質問を發したのである。

◇純粋素朴な恋愛とはいかなるものであるか。

◇その「純粋素朴な」恋愛は経済的依囑をはなれてのみ成立すべきものであるというが、経済的依囑を承認しない社会組織とは、いかなるものであるか。

このような質問を提出しておいて、いきなり高群の所論は飛躍した。自分の投じた二つの質問にまず自分の答えを明らかにする形その発言は、それは必ずしも論理的ではなかつたが、しかし高群のいわんとするところは、彼女の内部に描かれていた社会理想なるものを熱っぽく説明するところから始められた。

「すべての者がここでは労働者でなくてはならぬ。然り、筋肉労働者でなくてはならぬ。然り、生産労働者でなくてはならぬ。

で、真に筋肉労働者のみの社会、生産労働者のみの社会であらしめるためには、政治とか、事務とかの名によつて、多くの有閑の人種を貯え、あるいはまた学術とか芸術とかの名のもとにそれを置く分業的、集中的、統制的社会は排せられねばならぬ。

政治や事務は圧縮され、単純化されて、自治民の協力と変り、学術や芸術もまた、特定人、専門人の手から、完全に民衆の中へ

奪い還された社会こそ、われら労働者の社会であるといわねばならぬ。それは分業的、統制的社会ではなくして、総合的、集約的社会でなくてはならぬ。それは現在、反マルクス主義的新興思想として、真に自覚せる労働者、農民、婦人の中に侮りがたい勢力を確保しつつある自由連合主義思想の目ざす社会であらねばならぬ。」

「私はただ、与えられた恋愛観の問題の範囲内で、われらが心に久しくもとめている純粋素朴な愛とは何か、それは如何なる社会組織を母体として芽生えるものであるかということとを、検討したにすぎない。」

「山川菊枝氏よ。氏はいたずらに純粋素朴な恋愛とか、婦人の欲求とかを口にされる。けれど氏がマルクス主義を捧持しているかぎり、その言葉は、単なる無知な、単なる空疎な、そして無自覚であり、無責任であり、無内容なる言葉であつて、真に目ざめた婦人にたいして、何らの権威なき、嗤うべき、唾棄すべき振舞い

——

とまでいつている。このとき高群は素晴らしい意気込みであるが論旨は不十分である。しかし対立する二つの革命思想、そのアナキズムの自由連合主義の立場から、マルクス主義の中央集権、支配、政府と民衆との対立等を批判しつつ、山川のいう「純粋素朴の恋愛」がマルキシズム革命社会になお不可能なることを衝いているものようである。如何にもまずい（説得力を欠いた）論理の展開としかいいようもないが、提出された問題は重要である。こういうことなのだ。純粋素朴な美しい恋愛は資本主義社会には有り得ない（自由恋愛といつてもそれは男に頼つて生きる女が、より高く自分を相手

に買取らせるだけのことだ」という山川の指摘のうしろには、社会主義社会あるいはマルキシズム革命の後の社会ならば、それが可能であろうという主張が含まれている。高群逸枝は、逸脱するかに見えるほどの激越な口調で、純粋素朴な恋愛というものはマルキシズム革命国にだつて在るものか、といつているのである。資本主義社会で「最品つき特価品」だつた女性に、常識的な革命国家の下でだつて、それ以上の自由が与えられるはずがない。それは「無責任無内容な言葉だ」と反論しているのである。

さらに高群は山川のいつたもう一つの問題、「結婚による男への経済的依囑」という問題をとり上げてこういつたのである。

「経済的依囑とは何か。山川氏はこれを個人的意味に解された。結婚による依囑、男子による依囑と解された。けれど婦人は男子を離れ、結婚を離れて、社会の一単位として独立してもなお広義の意味、社会的意味の上から見ると、経済的依囑を出ない場合がある。」

「いわゆる『純粋素朴の恋愛』は、人類の経済的依囑の形式が、個人的にも、社会的にも、徹底的に除去された時においてはほかに芽ぐまないとわなくてはならない。資本主義は婦人を個人的に独立せしめた。然しその個人的独立というものは、無産階級に依囑した意味の上のものだ。で、美及び恋愛に、質的變化を与えらることは出来なかつた。」

こう主張した後につづけて高群は彼女の抱懐するアナキズムを「経済的依囑」という問題にひっかけて、さらに次のように展開して、山川菊枝の社会主義——マルクス主義と対比する。

「山川氏はいう『純粋素朴な恋愛は、すべての人が、経済的依囑

を離れてまじめな労働を営む時代に芽ぐむ」と。まじめな労働とは何か？ 政治家、事務家、頭脳労働者、遊芸人、家婦、こう見てくると今日でもすべての人々が、それぞれ仕事をもち、働いている。だがそれはまじめな労働者ではない。何となれば、それらの人々は直接的な生産者ではない。それらの人々は、工業労働者や農業労働者、ひっくりかえりていえずすべての筋肉労働者に依拠して生きているのだ。——こういう経済的依拠者が、社会的に承認されている限り、その社会は不純な社会的であり、有閑者の社会的であり、有閑者本位の美及び恋愛が、依然、その社会に維持され、真の恋愛、純粹素朴な恋愛は中々に芽ぐむものではない。」

性とは、「景品つきの特価品」みたいなものだ、といったのである。然らば「特価品」たらざるためには如何にすべきか、という問題がここに提出されたのであるが、山川はそれについては、その論文の最後で、

「婦人が恋愛を売らずに済む時代は、彼女が結婚によらずして生活し得る時代——まじめな労働によってのみ生活し得る時代でなければならぬ。婦人が単に性の対象たることに満足し、性によって生活することに何らかの不満と屈辱とを感ぜずにいる間は、職業的娼婦たるかと否とを問わず、彼女はついに性的奴隷であり、売物の一つであることに変わりはない。」

と、いいたのである。これは、当時の一部の「景品つき特価品」にたいしての批判としての意味はもつけれど、その山川の言葉の中に、性に関する封建的なまでの閉鎖観念の潜んでいることを曝露するものでもあった。

この高群の意見の根底はアナキズムであり、中々に理想主義の見解である。この立場から彼女は、山川の「純粹素朴の恋愛」と「経済的依拠」という解釈に、改めて鋭先を鋭く向けたのである。すでに政治、経済、労働の諸問題の上に立って、始めて自由な恋愛とは何かの論争に向うことができたのである。

女性が、経済的依拠から脱出することによって生活に自立し、男性と対等の社会的地位をわがものとする時期の来なければならぬこと、でなくば「景品つき特価品」であることを止むなすことにおいて、山川、高群の意見は一致するが、如何なる社会において、いかにえるなら、どのような社会革命の後にそのような社会が出現するかについては両者の意見は対立する。否、対立というよりも物差がちがいます。高群は、マルクス主義の世の中になつたとしても、筋肉労働者の労働とその生産に依拠する者はいるではないか。それらの存続がある間は、いかにえれば「分業組織であり、集中組織であるところのマルクス主義社会は、非生産労働者即ち経済的依拠者を宿命的に必要とするから不可である」と主張する。だ

が、このような対立をいくら論議しても到達する結着点を互に納得することはできない。

山川の論旨の中には、結婚というものの現実における不安定な生活様式とそれを習慣づけ、道徳化して、家に縛りつけてきた大家族制度とそれを必要としてきた日本社会の在り方、それに、もう一度戻っての考察が必要となるのではないか。つまりこうなのだ。男女

と見る」という見解への反駁であった。さらにその「結婚意識さえ排除すれば、純粹素朴な恋愛が生れる」という山川の主張にたいして、高群は又以下のように反論したのである。「結婚を生活手段と見る意識が變つても、純粹素朴な恋愛は浮上して来ない」ことをいうために、次のようにいったのである。

「無産婦人よ、お前は美しいものを着たいと思わぬか。社会主義の世となれば、お前達は皆ひとしくそれが着られる」(あるマルクス主義者の言葉)

恋愛の自由からも、生活の安定からも、各人が生きるための経済的組織の組み替えからも、考察し直す必要はないか、ということである。

この人にしたがえば、社会主義の世になつても、別に美には變りがないらしい。昔、有閑男性によって生み出された美が、そこへも亦持越されて行くものらしい。——それによって性の顧客をとらえる風潮は、現代と何ら變りなく持続されると見なくてはならない」

恋愛の、結婚の、意識というものが、如何に変化しつつあるか、変化せぬものが男女の関係の中に存続し得るのか、この問題の中に分け入っての論争までには、このときの二人の考察は至っていないが、この間における高群逸枝の次の言葉は記憶に値しよう。

「結婚を唯一の生活手段として見る意識が崩壊しかけたところに、近代の自由恋愛は生れたのだ。——」

×

×

資本主義経済は、有史以來始めて婦人を独立の生産的要素とし、男性の羈絆から切りはなした。独立の収入、独立の社会的地位を得て、はじめて婦人は独立の人格を主張し、独立の思想を抱くようになったのである。そこで、恋愛を論ずる場合にも、これと同じ理解を必要とする。即ち、近代の独立的な自由恋愛は、結婚——男子への依拠を生活手段として見る意識からの発生でなく、

×

実はそれを否定しつつある意志からの発生である。」

(つづく)

(一九二二、九、一六)